

登場人物

下人：使われていた主人から、四、五日前に「暇」を出された。
 老婆：死人の髪の毛を抜いて、かつらにする商売を行っている。

場所

「羅生門」の下 ↓ 楼上

時間

ある日の「暮れ方」

○『羅生門』発表の時代
 『羅生門』は大正四年「帝國文学」誌上に掲載された。
 同年には夏目漱石の『道草』や森鷗外の『山椒大夫』なども発表されている。
 なお、この前年（大三）には漱石の『ころも』が、翌々年（大六）には志賀直哉の『城の崎にて』が発表された。

あらすじ

次の表内の空欄に適切な語句を書き入れ、『羅生門』のあらすじをまとめてみましょう。

場面	人物	状況、出来事、心情、会話文など
羅生門の下	下人	<ul style="list-style-type: none"> ・雨に降りこめられ、行き所がなくて、「途方にくれていた」。 ・明日の暮らしをどうにかしようとして、 「盗人になる」よりほかに仕方がない」ということを、積極的に肯定するだけの「勇氣」が出ずにいた。
羅生門の楼上へ出る梯子	下人 老婆	<ul style="list-style-type: none"> ・死骸の中にうずくまる、猿のような老婆を見つける。 ・六分の「恐怖」と四分の「好奇心」とに動かされて、呼吸をするのさえ忘れる。 ・女の死骸から髪の毛を一本ずつ抜き始めた。 「恐怖」が少しずつ消え、老婆に対する激しい「憎悪」、あらゆる悪に対する「反感」が強さを増す。
羅生門の楼上	下人 老婆	<ul style="list-style-type: none"> ・老婆に太刀をつきつける。「憎悪」の心が冷める。安らかな「得意」と「満足」とがあるばかりである。 ・「この髪を抜いてな、かつらにしようと思うたのじゃ。」 ・「これとてもやはりせねば、餓え死にをすするじゃやて、」仕方がなくすることじゃわいの。」 ・老婆の話を聞いているうちに、心にある「勇氣」が生まれってくる。老婆の着物を「剥ぎとり」、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

漢字の学習 (次の漢字の読みを書きまじょう。)

災い (わざわ)	砕く (くだ)	始末 (しまつ)
顧みる (かえり)	暇 (ひま)	余波 (よは)
空模様 (そらもよう)	影響 (えいきょう)	夕闇 (ゆうやみ)
局所 (きょくしょ)	肯定 (こうてい)	遠慮 (えんりょ)
幸い (さいわ)	濁る (にじ)	天井裏 (てんじょううら)
揺れる (ゆ)	無造作 (むぞうざ)	範囲 (はんい)
未練 (みれん)	塞ぐ (ふさ)	円満 (えんまん)
成就 (じょうじゆ)	鋭い (ずんど)	存外 (ぞんがい)
平凡 (へいぼん)	侮蔑 (ぶべつ)	恨む (うら)

語句の学習 (語句と意味の組み合わせを線で結びまじょう。)

途方にくれる
とりとめのない
かたをつける
高をくくる
語弊がある

決着をつける。
言い方が適切でないため誤解が生じる。
どうしたらいいかわからなくて困る。
はつきりとしたまとまりがない。
相手の程度を見くびる。

芥川龍之介について (一八九二(明治二五年)〜一九二七(昭和二年))

東京に生まれる。誕生日の明治二五(一八九二)年三月一日は、辰の年辰の月辰の日で、しかも生まれた時刻も辰の刻(午前八時ごろ)だったところから、辰之助「龍之介」と命名されたという。生まれつき神経質でひよわな体質の少年だったが、学業成績は抜群で、泉鏡花や江戸の戯作に親しんだ。

大正二年、一高から「東京帝国」大学英文科に進学。雑誌「新思潮」(第三次・四次)に参加し、創作活動も在学中に開始した。「羅生門」について発表した「鼻」が「夏目漱石」に激賞され、『芋粥』『手巾』を書いて文壇に登場。

大正四年末からは、漱石門下の集まりである木曜会にも出席した。結婚の年(大正七)には『蜘蛛の糸』を発表。また『地獄変』を新聞に掲載した。さらに『奉教人の死』や『枯野抄』などによって、日常生活とは異質の感動を求める、「芸術至上主義」の作風を明瞭に示した。

大正一一年、『藪の中』『トロッコ』などを発表するが、このころから神経衰弱や胃けいれんなどに悩み、身体の不調を訴えるようになる。さらに関東大震災以後の「プロレタリア文学」の勃興という社会機運の中で、創作活動も停滞しがちになった。

昭和二年、『河童』の執筆や「谷崎潤一郎」との論争などの活動を行うが、「唯ぼんやりした不安」を訴えて、枕元に『聖書』を置いて服毒自殺する。『歯車』『或阿呆の一生』『西方の人』などが、遺稿として残された。